

がん看護病態生理治療学

単位数：2 単位

時間数：30 時間

開講年次及び学期：1 年次前期

○福田誠司	医療安全管理部 臨床遺伝診療部 教授
浦野 健	病態生化学 教授
原田 守	免疫学 教授
磯部 威	呼吸器化学療法内科学 教授
京 哲	産科婦人科学 教授
田島義証	消化器総合外科学 教授
板倉正幸	乳腺外科 臨床教授
鈴木律朗	先端がん治療センター 腫瘍血液内科 准教授
玉置幸久	放射線治療学 准教授
津端由佳里	先端がん治療センター 呼吸器化学療法内科 講師

1. 科目の教育方針

分子標的療法や優れた支持療法の開発に伴い、がんの治療成績は一昔前に比べて改善し、必ずしも死の病ではなくなった。しかし、日本人の二人に一人は何らかのがんに罹患し、死亡原因の一位はがんである。したがって、がんに関わる看護職のニーズは今後益々増加すると予想される。がん患者に対する看護に必要な専門能力を高めるためには、がんの病態を知り、病態に基づいた理論的な治療法とそれらの限界を理解することが求められる。即ち、がん細胞は正常の細胞と比較して何が異なるのか、その結果どのようなことが体内で起きるのか、それらに対してどのように治療戦略が立てられるのか、そして治療に限界が生ずるとすれば原因は何かを理論的に理解する必要がある。本科目では、がんの発生、増殖、分化機構の破たん、転移浸潤、治療抵抗性など、治療や予防に関わるがん細胞特有の分子機構を学び、それらに基づいた治療法と合併症を深く理解することを目指す。

2. 教育目標

- 1) がんの発生に関わるゲノム異常、染色体異常を理解し、説明できる。
- 2) がん幹細胞とがんの進化、がん細胞の多様性を理解し、説明できる。
- 3) がんの微小環境とがん細胞の相互作用を理解し、説明できる。
- 4) 免疫機構の破たん、炎症、感染ががんの発生に関わる分子機構を理解し、説明できる。
- 5) がんの増殖機構と薬剤抵抗性の分子機構を理解し、説明できる。
- 6) がんの転移、浸潤に関わる分子機構を理解し、説明できる。
- 7) がん薬物療法の原理、限界、副作用を理解し、説明できる。
- 8) 分子標的療法の理論的根拠を理解し、説明できる。
- 9) 造血幹細胞移植の目的、意義、方法と合併症を理解し、説明できる。
- 10) がんゲノム医療の目的、意義、方法、限界を理解し、説明できる。
- 11) 固形腫瘍の病態と治療法を理解し、説明できる。

- 12) 造血器腫瘍の病態と治療法を理解し、説明できる。
- 13) オンコロジー・エマージェンシーの原因と対応を理解し、説明できる。

3. 教育の方法、進め方、評価

【方法と進め方】

講義、学生によるプレゼンテーション、討論によって進める。

【評価】

授業毎に課題を提示し、レポートを提出する。内容を教育目標に基づいて評価する。出席状況と授業への積極的参加も加味して評点する。

4. 使用テキスト

- 1) 日本臨床腫瘍学会編集「新臨床腫瘍学」改訂第4版 南江堂
- 2) DeVita, Hellman, & Rosenberg's Cancer, 10th edition. Principles & Practice of Oncology WOLTERS KLUWER

5. 教育内容・授業計画

回	内 容	担 当
1	がん細胞とは何か? 総論と overview	福田誠司
2	がん細胞のゲノム異常とエピジェネティクス	浦野 健
3	がん細胞の増殖、転移、薬剤抵抗性の分子機構	浦野 健
4	がん細胞と炎症、がん細胞の免疫逃避機構	原田 守
5	がんゲノム医療と遺伝性がん	福田誠司
6	がん薬物療法と分子標的療法の原理と実際	津端由佳里
7	がん放射線治療の原理と実際	玉置幸久
8	造血幹細胞移植の原理と実際	鈴木律朗
9	乳がんの病態生理と治療	板倉正幸
10	肝臓がん、すい臓がんの病態生理と治療	田島義証
11	肺がんの病態生理と治療	磯部 威
12	大腸がん、胃がんの病態生理と治療	田島義証
13	子宮がん、卵巣がんの病態生理と治療	京 哲
14	造血器腫瘍の病態生理と治療	福田誠司
15	オンコロジー・エマージェンシーの原因と対応	福田誠司